

第16回日本冠疾患学会学術集会

河 口 廉*

第16回日本冠疾患学会は平成14年12月13日(金)と14日(土),大阪ロイヤルホテル隣の大阪国際会議場(大阪市北区中之島)にて開催された。

本学会は内科系と外科系の共同作業が不可欠との考えに立脚して,第7回より内科・外科の2人の会長制が採用されており今回も例年通り,内科系;近畿大学医学部循環器内科教授 石川欽司先生,外科系;近畿大学医学部心臓外科教授 佐賀俊彦先生の2会長のもと内科,外科の両分野より演題が多数発表され,そのひとつひとつの演題に対して,内科,外科のそれぞれの立場からの活発な討議がなされていた。

また,海外招請講演はCedars-Sinai Medical CenterのShah先生による“Inflammatory Paradigm of Athero-thrombosis”とCarolina Heart InstitutesのBolton先生による“OPCAB and the Process and Benefits of Early Discharge”と銘打たれた講演が企画され,現在の日本と海外の日常臨床の違いと今後の日常臨床に有用な内容を聞くことができた。

さらに,特別講演1では九州大学の竹下 彰教授から,現在の日本におけるPCIの現状と,問題点が警鐘され,同時に外科側を代表して,日本女子医科大学の遠藤真弘教授から近年の心臓血管外科の進歩が提示され,非侵襲と侵襲,両治療法の長所と限界についての討議がなされた。特別講演2ではUniversity of Virginia School of MedicineのDiMarco先生の“Usefulness/Effectiveness of Biventricular Pacing”と銘打たれた講演で,近年本邦でも臨床使用されつつあるBiventricular pacingの有用性についての話があり,Biventricular pacingが重症心不全症例に対する新しい治療として確立し得ることを実感するとともに,本邦においても早急

な両心室ペースングデバイスの導入が望まれた。

シンポジウムは「硝酸薬の有用性と限界」と「中,長期遠隔成績からみた虚血性心筋症に対する外科治療戦略」が企画され,「硝酸薬の有用性と限界」では,本邦での虚血性心疾患に対する硝酸薬の頻用の是非,有用性と限界,使用法や耐性の問題等に関して,大規模臨床試験の結果をふまえ討議された。また,「中,長期遠隔成績からみた虚血性心筋症に対する外科治療戦略」では,虚血性心筋症に対する左室容積を縮小術に関して,適応,術式の検討および,それぞれの施設における遠隔期成績等が提示され,心機能の改善を図る取組みに対する外科医の熱意に感銘を受けた。

パネルディスカッションでは“血管内視鏡,IVUSからみた急性冠症候群の治療戦略”について,それぞれの演者の先生から,血管内視鏡,IVUSによる急性冠症候群における不安定プラークの特徴および,プラーク崩壊(plaque rupture, plaque elosion)の所見,病態,発生機序,その後の経過の違いや,血栓形成No-reflow現象を起こしやすい病変形態の検討などが討論された。その他,実際の画像も数多く提示され,近年,使用可能となったdistal protection deviceが有用である可能性が多く報告された。

その他,教育講演,市民講座および大阪警察病院心臓センターからのTranscatheter Imaging Live Demonstration等,二日間に数多くの企画が設けられていた。

学会の主旨である“内科と外科の専門家が一つになって,真にpatient orientedの精神で冠疾患の医学と医療を学び合い実行する”の理念に一致し,冠動脈疾患に対して内科外科領域を隔てなく幅広い治療を考慮する意識を再認識できた有意義な二日間であった。

*群馬県立心臓血管センター循環器内科